

J.S.S.W NEWS

No.131

Contents

日本ソーシャルワーク学会通信

2021年10月1日

【発行責任者】 小山 隆

【編集責任者】 横山登志子

I. 巻頭言「危機の時代に学術が果たすべき役割」…… 和気 純子…	1
II. 日本ソーシャルワーク学会 2021年度第38回大会（WEB開催）の報告 ……………	2
III. 理事会報告（2021年度第2回理事会） ……………	7
IV. 総会報告（2021年度総会） ……………	9
V. 研究セミナーのご案内 ……………	20
VI. 図書紹介：自著紹介 ……………	21
編集後記 ……………	横山 登志子…23

I. 巻頭言

危機の時代に学術が果たすべき役割

東京都立大学／学会理事 和気 純子

8月末、日本では新型コロナウイルスのデルタ変異株による感染が拡大し、いわゆるパンデミック「第5派」の真っ只中にある。1年半にも及ぶ長い自粛生活で、医療・福祉従事者はもとより、飲食業などの特定の産業に従事する人々を含めた国民の多くが疲弊している。このような状況で、ソーシャルワーク研究に携わる一人として、研究＝学術が危機において何を成しえるのか、あるいは成すべきであるのか考えてみたい。

筆者は、昨年10月より日本学術会議第25期会員の任命を受け、社会学委員会に社会福祉学分科会を設置するとともに、会議内に新設された「パンデミックと社会に関する連絡会議」にも所属している。ところで、日本学術会議は昭和24年に設置された機関で、内閣総理大臣の所管の下、政府から独立して科学に関する審議、国内外の科学者間のネットワーク形成、政府に対する政策提言や世論啓発を行うと規定されている。法令上、210名の会員によって構成されるが、第一部（人文・社会科学）に所属すべき6名の任命を総理大臣が拒否したことで、社会的な問題となっている。学術会議からは、繰り返し任命しない理由の説明と速やかな任命を求めているが、今日にいたっても残念ながら進展はみられない。この6名が政府のめざす政策と異なる意見を発信していることが原因であるとの見方がなされているが、もしそうであるとするならば、研究が時の権力者＝政府の意向に左右される、あるいは付度する風潮を生み出しかねないという危惧は拭えない。こうした危機感から、多くの学会がこの拒否問題に反対声明を発出し、学問の自由と政治からの中立の重要性を訴えている。

現在、日本学術会議は政府への要求を続けながら、一方で世界規模で未曾有の危機をもたらしているの新型コロナウイルスによるパンデミックに対し、学術が総力をあげて正確な科学的知見を発信し、科学に基づく解決を模索する取り組みを行っている。すでに社会福祉学をはじめとする多様な分野が英知を出し合い、情報共有する機会を断続的に設けている（詳細はHPを参照）。6月25日には、社会福祉学分科会により、公開シンポジウム「コロナ禍における社会福祉の課題と近未来への添付～直面する危機から考える～」が開催された。ここでは、コロナ禍で既存の構造的な格差、脆弱性（vulnerability）が顕在化し、対立と分断が拡大していることが指摘され、リスク・危機に潜在する不平等の構造的な分析と、リスク・危機に対応しうる

レジリエントなシステムや支援方法の開発が議論された。

危機的な状況にあって、これまで潜在化していたニーズが顕在化し、顕在化していたニーズはさらにその深刻さを増している。一方、オンラインによる面談や会議など、技術革新も生まれている。こうした危機と革新が錯綜する時代において、ソーシャルワーク研究が取り組むべき課題は多い。今、ソーシャルワーク研究に携わる一人一人が、この危機を乗り越えるために必要な研究を問い、知見を生成・発信していくことが求められる。

Ⅱ. 日本ソーシャルワーク学会 2021年度第38回大会（WEB開催）の報告

1. 第38回大会を終えて

北海道医療大学／実行委員長／副会長 志水 幸

去る、7月17日（土）～18日（日）にオンライン・ライブ配信により、日本ソーシャルワーク学会第38回大会が開催された。大会テーマは、「ソーシャルワークの新たな地平 - 継承と刷新 - 」である。このテーマには、わが国のソーシャルワーク研究の新たな地平の構築に資するべく、グローバルな動向を踏まえた議論の場を設定する意義が込められている。

2014年の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の採択以降、2016年には「アジア太平洋地域における展開」が、翌2017年には「日本における展開」が採択されている。2018年には新たな「グローバルソーシャルワーク倫理原則声明」が採択され、それを受け現在は2020年～2030年までの「グローバルアジェンダ」への取り組みが展開されている最中にある。まさに、現代のソーシャルワークは、時間的にも空間的にも新たな地平に立っている。殊に昨年度は、わが国でも「ソーシャルワーカーの倫理綱領」が改定され、国際的にも新たな「ソーシャルワーク教育および訓練のためのグローバル・スタンダード」が改定されている。本大会は、これら一連の状況の理解・普及の場を提供し、伝統的なソーシャルワークから継承すべき遺産とは何か、新たな潮流を踏まえ刷新すべき点とは何か、さらには日本的な展開のあり方等について議論を深める機会となった。

コロナ禍の状況を踏まえ、開催にあたり主催を日本ソーシャルワーク学会本体とし、研究推進第2委員会を中心に実行委員会を組成し大会準備・運営等に当たった。また、共催団体として、公益社団法人日本社会福祉士会、公益社団法人日本精神保健福祉士会、公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会、特定非営利活動法人日本ソーシャルワーカー協会のご協力をいただいた。改めて感謝申し上げたい。また、本大会は、本学会におけるオンライン・イベントとして初の課金開催となったが、132名の事前登録者に6名の招待者を加え、延べ138名の参加者により活発な議論が行われた。

なお、プログラムの詳細は、以下の通りである（敬称略）。

〈大会1日目〉

基調講演「新倫理綱領の到達点と今後の課題」保良昌徳（日本ソーシャルワーカー協会会長）

学会企画シンポジウム①「ソーシャルワーク教育の新しいグローバルスタンダードの可能性について検討する」

コーディネーター ヴィラーク・ヴィクトル（長崎国際大学）

シンポジスト

「ソーシャルワーク教育のグローバルスタンダード」

木村真理子（日本女子大学名誉教授）

「新しいグローバル・スタンダードと福祉士養成新カリキュラム－『学問』としてのソーシャルワーク研究に基づく専門職の養成に向けて－」

空閑浩人（同志社大学）

「ソーシャルワーク教育の課題と新しいグローバル・スタンダードの示唆」

和気純子（東京都立大学）

「『新しいグローバル・スタンダード』に対する日本の実践現場からの期待」

中島康晴（REGIONO グループ）

学会年次総会

〈大会 2 日目〉

学会企画シンポジウム②「福祉課題解決に向けた変革プログラムの発展に有効な形成的評価の方法～

実践家参画型エンパワメント評価と、その基盤を支える中間支援組織の役割～」

コーディネーター 大島巖（東北福祉大学）、賛川信幸（日本社会事業大学）

シンポジスト

「実践家参画型で進める形成的評価の可能性～評価アプローチ法の概要と実施基盤を支える中間支援組織の機能と役割～」

大島巖（前掲）、新藤健太（群馬医療福祉大学）、賛川信幸（前掲）、源由里子（明治大学）

「生活困窮者自立相談支援事業に導入された実践家参画型形成的評価の成果と、その成果生成を支える中間支援組織の機能と役割」

新藤健太（前掲）、池本修悟・池田徹（ユニバーサル志縁センター）、源由里子（前掲）

「精神障害者家族への心理教育プログラムの実装を促進するコンサルテーションのあり方～ EBP プログラム実装の成果を支える中間支援組織の機能と役割～」

仁科雄介（日本福祉教育専門学校）、賛川信幸（前掲）、増田奈美（日本社会事業大学）

指定発言

「福祉系大学の役割に着目して」

宮城孝（法政大学）

「休眠預金等活用事業の経験からみた中間支援組織に期待されるもの」

今田克司（株式会社ブルー・マーブル・ジャパン）

「ソーシャルワーク学会から」

久保美紀（明治学院大学）

自由研究発表

第1分科会座長：荒井浩道（駒澤大学） 発表4件

第2分科会座長：ヴィラーグ・ヴィクトル（長崎国際大学） 発表3件

第3分科会座長：池田雅子（北星学園大学） 発表4件

2. 学会企画シンポジウム（1）報告

ソーシャルワーク教育の新しいグローバル・スタンダードの可能性について検討する

長崎国際大学／理事 Virág Viktor（ヴィラーグ ヴィクトル）

学会企画シンポジウム①では、国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）と国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）が2020年11月に更新した『ソーシャルワーク教育及び養成のグローバル・スタンダード』に

ついて取り上げた。もともと2004年に定められたグローバル・スタンダードであるが、新しいバージョンは、2014年に採択された『ソーシャルワーク専門職のグローバル定義』と2019年に更新された『ソーシャルワークにおける倫理原則のグローバル声明』の内容も反映するようになり、本シンポジウムは以下のような構成に沿って展開した。

報告①では、IFSW教育諮問委員会アジア太平洋地域代表として、新しいグローバル・スタンダードの作成過程に実際に携わった木村真理子氏は、更新プロセスの経緯と注目すべき新しい内容について解説した。報告②は、IASSWの日本代表理事と日本ソーシャルワーク教育学校連盟の副会長を務めている和気純子氏が担当し、ソーシャルワーク教育の国内外動向及び課題と、その中で新しいグローバル・スタンダードが与える示唆についてまとめた。報告③において、社会福祉士養成課程教育内容等見直し作業チームの委員を務めた空閑浩人氏は、新しいグローバル・スタンダードと福祉士養成新カリキュラムをテーマに、本学会の副会長として、ソーシャルワーク研究の視点の交えた議論を展開した。報告④の中島康晴氏は、日本ソーシャルワーカー連盟（日本社会福祉士会副会長）と実践者の立場で、新しいグローバル・スタンダードに日本の現場が期待できることについて整理した。

以上のように、テーマに最も相応しい国内の研究者が登壇するシンポジウムとなり、各報告の終了後に、参加者の質問に答えながら、活発なディスカッションが交わされた。その中で、新しいグローバル・スタンダードの日本における今後の活用方法についても話し合われ、「当日のシンポジウムは出発点に過ぎない」という共通理解が結論として形成された。

3. 学会企画シンポジウム (2)

福祉課題解決に向けた変革プログラムの発展に有効な形成的評価の方法 ～実践家参画型エンパワメント評価とその基盤を支える中間支援組織の役割～

東北福祉大学／副会長 大島 巖

このシンポジウムは、本学会の共同研究として「実践家と協働で進める効果的福祉実践プログラムモデル形成評価研究会」（責任者：大島巖）が、2014年度から取り組んで来た研究の成果物である「実践家参画型エンパワメント評価(PBEE: Practitioner Based Empowerment Evaluation)」の意義と概要・特色、有効性を共有すると共に、その取組みの基盤を支える中間支援組織の役割を3名の指定発言者のコメントと共に討議することを目的に開催した。研究成果の総論的な報告（大島報告）と、2つの評価事例の取組み報告（新規事業の形成・改善段階の評価事例（新藤健太報告）・EBPプログラムの実装段階の評価事例（仁科雄介報告））を行った上で、PBEEを実践現場において幅広く活用するために必要な中間支援組織の機能と役割を検討した。

PBEEを支える中間支援組織として福祉系大学やソーシャルワーク職能団体・ソーシャルワーク系学会の役割は重要である。指定発言では、それぞれの組織がPBEEをどのように支え発展させることができるのかについて、福祉系大学における地域福祉の教育・研究における可能性と課題の観点から（宮城孝氏）、また休眠預金等活用事業に関与するご経験から、サードセクター論からみる中間支援組織の役割の視点から（今田克司氏）、そしてソーシャルワーク学会における実践に基づいた知の創造の観点から（久保美紀氏）、それぞれご討議を頂いた。シンポジウムには、80名近い参加者を得て、限られた時間だったが有意義な意見交換がされた。福祉課題に取り組むソーシャルワーク実践家が、変革プログラムに取り組むためのスキルや知識、コンピテンスを高める方法論について示唆の得られる貴重な場になった。

4. 自由研究報告の分科会報告

(1) 第1分科会報告

駒澤大学／理事／座長 荒井 浩道

自由研究発表第1分科会では、4件の報告が行われた。第1報告「福祉事務所におけるソーシャルワーカーを人員配置するための考察 その①—ソーシャルワーカーの費用対効果を算出する試みを通して」（橋本夏実、川廷宗之）、第2報告「2つのプレアルコホリック単一症例実験デザインの相互作用によるハーム・リダクション」（渡邊未央、渡邊修宏）、第3報告「長期入院精神障害者の地域移行に関する文献検討」（鶴岡和幸、長崎和則）、第4報告「中国上海市における社区居宅養老サービス事業の展開過程」（孫心悦）と、本学会らしい多様な方法、対象、領域の報告があった。

報告ごとに一定数の参加者の出入りがあった。これは参加者が、他の分科会と行き来をすることで関心のある報告を聴こうとした結果といえる。双方向性が担保された Zoom ミーティングを使用することで、質疑応答もスムーズに行うことができた。ネットワーク上のトラブルもなく、報告者、参加者の協力のもと時間通りに進行することができた。

(2) 第2分科会報告

長崎国際大学／理事／座長 Virág Viktor

第2分科会の共通課題として、障害のある人のエンパワメントのために必要なソーシャルワーク研究が浮き彫りになった。

最初に、鈴木美乃里氏は、共同研究者（野口晃菜氏と熊上崇氏）も代表して、「矯正施設を退所した障害のある人への就労移行支援・就労継続支援に関する研究」というテーマで報告を行った。インタビュー調査を踏まえた支援モデル図が提示された。

続いて、小野田由実子氏より、「障害のある人の表現活動におけるソーシャルワーク実践の可能性」という報告があった。その中で、当事者の芸術等活動の成果に焦点を当てた文献調査結果の質的分析から、特に当事者と地域機関・組織の変化について論じられた。

最後に、飯村史恵氏は、「エンパワメントの視点から考える成年後見制度の課題」について報告した。主に障害者権利条約の観点から、日本の成年後見制度の問題点について指摘し、社会モデルを超えた人権モデルについて提示した。

(3) 第3分科会報告

北星学園大学／理事／座長 池田 雅子

本分科会は、4本の研究発表があった。第1報告、栄セツコ会員による「精神障害当事者の語りを生かしたヒューマンライブラリーに関する一考察」では福祉教育プログラムとして語り手の当事者が「本」の役割を果たすヒューマンライブラリーの特徴と応用可能性について教育講演との比較から発表された。第2報告は石附敬会員による「オンラインを中心とした社会福祉援助技術学内実習プログラムに対する実習生の満足度・理解度と実習後の学生ワークエンゲージメントとの関連性の検討」は、コロナ禍により全面オンライン実習を受講した学生に調査し、実習経験による仕事に対する肯定的イメージ、学びへの自己評価の高さと、仕事への動機付けや熱意を測る「ワークエンゲージメント」に関係があるとの結果が示された。第3報告の

加藤利恵会員による「社会福祉士養成において教員が行う実習指導についての質的研究」では、教員の指導過程と実習学生との相互作用を、「発生の三層モデル」を用いて分析し、教員が実習の全過程において発信とフィードバックをすることが学生との関係構築と成長につながるという結果を報告された。第4報告は添田正揮会員による「ソーシャルワークにおける文化的コンピテンシー概念の生成過程」で、アメリカのソーシャルワークにおける文化的コンピテンシー概念の整備に影響を与えた「文化的コンピテンシスの多次元モデル」を紹介し、日本のソーシャルワーカー養成教育に導入する際にも、卒業時に何が出来るかを重視したアウトカム基盤型教育への転換の必要性が報告された。

4報告とも社会福祉教育をテーマとしており、本学会シンポジウムで扱われた教育のグローバルスタンダードと関係しており、常時30名前後の参加者がおり、関心の高さが伺われた。質疑応答においても、実践内容の共有や今後の研究方法や視点に向けた示唆や質問など活発な議論が展開され、発表者・参加者ともに有意義な時間を持つことが出来た。

5. 参加者の感想

2021年度日本ソーシャルワーク学会第38回大会に参加して

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所上席研究員 松尾 加奈

2年前に淑徳大学で開催された大会まで、物理的に同じ場において議論を聞く学会が当たり前であった。コロナ禍の収束がまだ見えない今では、いかに幸福なことだったのかと思う。

第38回大会基調講演は保良氏より、日本の「ソーシャルワーカーの倫理綱領」改定の動きから採択完了までの2年8か月の議論、論点、改正点、課題について精緻な報告がなされた。保良氏が指摘した社会福祉とソーシャルワークの概念整理の必要性の課題という言葉が印象的だった。筆者は両者の整理を海外の研究者に英語で説明することの難しさを常に感じていた。

学会企画シンポジウムは、世界のソーシャルワークの議論と動向に造詣の深い木村氏、和気氏、社会福祉士養成教育をけん引する空閑氏、実践を科学的に語る中島氏が登壇者として一堂に会する貴重な機会と、筆者はこの企画を楽しみにしていた。空閑氏が指摘したように、日本の社会福祉教育では、「国際」や「グローバル・スタンダード」が、どこか遠いところにおかれた議論のように映る。しかし国境を越えて日本で生活をしている外国に関わりのある人々は日本社会に存在しており、しかも社会福祉システムからこぼれている人も多いという現実がある。社会福祉が国家の責任において提供されるものであるとしても、ソーシャルワーカーはソーシャルワークのグローバルな文書である定義やスタンダードに拠って立ち、社会福祉システムとの倫理的ジレンマと対峙する責任があるだろう。シンポジウムで中島氏が紹介した「マクロ・レベルの介入ができる」と答えた専門職が3割にとどまるという調査結果も現実として重く受け止めなければならぬと感じた。

2日間のオンライン上での交流を通じて痛感したことは、学会は研究者には必要不可欠なものであるとの再認識である。この貴重な交流の機会をオンライン配信で確保してくださった事務局、関係者の皆さまのご尽力に心より御礼申し上げます。

日本ソーシャルワーク学会第38回大会自由研究発表第2分科会に参加して

山梨県スクールソーシャルワーカー／スーパーバイザー 渡辺 実子

自由研究発表第2分科会では「矯正施設を退所した障害のある人への就労移行支援・就労継続支援に関する研究」「障害のある人の表現活動におけるソーシャルワーク実践の可能性」「エンパワメントの視点から考

える成年後見制度の課題」の3つの発表を聞いた。どれも私にとっては新鮮な視点を与えてくれるものであった。「矯正施設を退所した障害のある人への就労移行支援・就労継続支援に関する研究」では近年矯正施設において障害のある人の割合が多いことが明らかになっている状況で触法障害者の受け入れ経験のある12の地域生活移行支援事業所へインタビュー調査を行い、SCATを用いたデータ分析から就労移行支援モデルを作成したとの報告であった。考察では利用決定前、決定時のハードルへの対応、利用中では触法障害者ならではの支援について述べていた。司法と福祉の連携については多くの課題が見られる中で、今回のように支援モデルの構築を試みた点は非常に興味深いものがあった。当事者である障害のある方が犯罪に至ってしまう経緯がここでいう犯罪トリガーそのものとトリガーへの対応方法と関連しているのかということが気になった。「障害のある人の表現活動におけるソーシャルワークではソーシャルワーク実践としての新たな可能性と考察の中で言われていたが、今回の国内文献のレビューからより深い調査が楽しみだと感じた。「エンパワメントの視点から考える成年後見制度の課題」は今後拡大しつつある制度運用への鋭い示唆だと感じた。自身も成年後見人として活動していた経験から、ソーシャルワーカーとしての成年後見活動は悩ましいものがあった。研究の考察でも述べられている本人と支援者の協働プロセスという言葉のように成年後見制度が当事者のものでなければならないということに深く同意する。3者の発表を含めこの大会を通じてソーシャルワークそのものについて改めて考えさせられるものがあった。

Ⅲ. 理事会報告（2021年度第2回理事会）

日時：2021年7月10日（土）18時～20時（ZoomによるWEB会議）

役職	氏名	所属	出欠	
会長	小山 隆	同志社大学	出	
副会長	久保 美紀	明治学院大学	出	
	志水 幸	北海道医療大学	出	
	大島 巖	東北福祉大学	出	
	空閑 浩人	同志社大学	出	
理事	池田 雅子	北星学園大学	出	
	大谷 京子	日本福祉大学	出	
	木村 容子	日本社会事業大学	出	
	横山 登志子	札幌学院大学		欠
	和気 純子	東京都立大学	出	
	浅野 貴博	ルーテル学院大学	出	
	荒井 浩道	駒澤大学	出	
	岡田 まり	立命館大学	出	
	佐藤 俊一	NPO法人スピリチュアルケア研究会ちば	出	
	白川 充	仙台白百合女子大学		委任状
	杉野 聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校		委任状
	保正 友子	日本福祉大学	出	
	ヴィラークヴィクトル	長崎国際大学	出	
監事	黒木 保博	長野大学	出	
	岡本 民夫	同志社大学名誉教授	欠	
庶務	野村 裕美	同志社大学	出	

1. 第38回大会（7月17日、18日）について

参加申込み状況等の報告があり、前日（7月16日）の正午まで受付を延長する旨了承された。

2. 研究推進第一委員会より

(1) 学会誌編集委員会から、学会誌第42号の編集経過、第43号の投稿締切及び査読依頼について報告が

あった。また、投稿・査読依頼（論文、評価票の送付）や査読結果の返送等の手続きを電子メールで行うこと、およびこれらの電子化に伴う投稿規程・執筆要領の改訂について検討する旨了承された。

(2) 研究奨励委員会から、会員研究奨励費の審査結果についての報告・提案があり了承された。

3. 総会資料（案）について

7月17日（土）開催の総会資料について、「総会資料（案）」に沿って、主に議案内容についての確認や協議を行った。

4. 役員選挙について

選挙管理委員会の設置やスケジュール等について、確認・協議を行った。

5. 会員の動向

前回理事会（5月23日）以降に申し込みのあった以下11名の方の入会が承認された。退会の申し出はなしであった。

会員種別	氏名	所属	備考
1 正会員	トウ カイ	早稲田大学大学院人間科学研究科	博士後期課程
2 正会員	立石 真司	特定非営利活動法人みたけ弥勒クラブ	
3 正会員	中越 章乃	東海大学健康学部	
4 正会員	鶴岡 和幸	広島文化学園大学	
5 正会員	米田 龍大	北海道医療大学大学院看護福祉学研究科	博士課程
6 正会員	熊上 崇	和光大学	
7 正会員	山本 大輔	特別養護老人ホーム天神の杜	
8 正会員	淡路 和孝	堺第3地域包括支援センター	
9 正会員	佐藤 優司	宮城県北部児童相談所	
10 正会員	野口 晃菜	株式会社 LITALICO	
11 正会員	小野田由美子	法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻	博士後期課程

6. 今後の理事会日程について

事業計画の内容や進捗状況の共有のために、10月から11月頃に理事会開催をする予定。

7. その他

2021年度学会セミナーの企画について提案があった。第二委員会と国際委員会との共同企画とすること、内容は「ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs」をテーマとすること、オンライン開催、同時通訳の依頼、予算等の企画案について提案があり、協議を行った。日程含めて詳細は今後委員会を中心に検討していく旨、了承された。

IV. 総会報告（2021年度総会）

2021年度総会は、7月17日（土）15時40分～16時45分で、オンラインで開催された。小山隆会長の挨拶に続き、総務担当の空閑副会長が、参加者の承認を得て議事進行を務めた。提案された以下の議案について、すべて承認された。

I. 議案

議案〔1〕 2020年度活動報告（案）

1. 2020年度理事会開催報告（定例3回）

2020年度第1回：2020年5月24日（日）13時～16時（* web会議）

〔内容〕 学術奨励賞の選考、2019年度活動報告、2020年度委員会構成の確認、2020年度活動計画、会員の異動ほか

2020年度第2回：2020年6月27日（土）20時～22時（* web会議）

〔内容〕 2019年度活動報告及び2019年度決算報告、2020年度活動計画及び2020年度予算、会員の異動ほか

2020年度第3回：2021年1月24日（日）17時～19時（* web会議）

〔内容〕 2020年度各委員会中間活動報告、会員の異動ほか

2. 2020年度第37回大会開催報告

以下のとおり第37回大会を開催した。約170名の参加があった。

大会日時：2020年7月4日（土）・5日（日）

大会テーマ：「ソーシャルワーカー地域・文化固有の知を基盤として」

大会担当校：鹿児島国際大学（オンライン開催） 大会長：高橋信行（鹿児島国際大学）

3. 2020年度委員会活動報告

（1）研究推進第1委員会（委員長：久保美紀）

○学会誌編集委員会（委員長：和気純子）

①学会誌発行に向けての作業

40号・41号を学会ホームページ上に電子ジャーナルとして発行した。

②学会誌のJ-Stageでの公開

③「書評リプライ」のコーナーを創設した。

④会員の積極的投稿を促すとともに、学会誌の質の向上を図った。

⑤学会誌を通して、会員の研究成果をより広く社会に発信できるように努めた。

⑥投稿規程・執筆要領の継続的な検討を行った。

○学会賞選考委員会（担当理事：木村容子）

①2020年度学会賞受賞者の決定（旧年度選考委員による選考）

・学術賞（学会員のうちで顕著な研究業績を上げた者の顕彰）

植戸貴子会員『知的障害児・者の社会的ケアへ「脱親」のためのソーシャルワーク』
（関西学院大学出版会、2019年3月）

・学術奨励賞（学会員のうちで研究の発展が期待される若手会員の研究奨励）

増井香名子会員『DV 被害からの離脱・回復を支援する 被害者の「語り」にみる経験プロセス』（ミネルヴァ書房、2019年10月）（*第37回大会時に2名の授賞式を行った）

② 2021年度学会賞受賞者の選考を行った。

○研究奨励委員会（担当理事：大谷京子）

会員の個人研究及び共同研究の促進のため、会員研究奨励費の募集をメーリングリストやホームページを通じて行った。2020年度会員研究奨励費の申請について、受付期間を延長したが、申請なしであった。

(2) 研究推進第2委員会（委員長：志水幸）

○大会企画

① 2020年度第37回大会の開催

② 2021年度第38回大会について、内容の企画や調整を行った

○研究集会企画

以下の研究セミナーを開催した。33名の参加があった。

テーマ：「コロナ渦中のその先を見据えたソーシャルワーク：1年間の変化と今後の展開に向けて」

日 時：2021年3月28日（日）13時～15時30分（オンライン開催・参加費無料）

○共同研究活動

① 「実践家と協働で進める効果的福祉実践プログラムモデル形成評価研究会」の継続（担当：大島巖）

第37回大会時に「ソーシャルワークとプログラム開発・評価」をテーマに行う学会企画シンポジウムについて、内容等についての検討を行った

② 「日本のソーシャルワーク研究に関する俯瞰的・包括的研究会」の継続（担当：小山隆）

ソーシャルワーク研究に関する資料のアーカイブ化への取り組みを行ってきた。研究会としてはひとまず終了して、これまで収集・整理した資料のデータ化を行っていく。

③ 「RSW共同研究」（全国母子生活支援施設協議会と本学会との共同研究）（担当：白川充）

仙台WGと京都WGとに別れて研究活動を行った。

2020年11月28日（土）仙台白百合女子大学において、仙台WGと京都WGとの合同シンポジウム「母子生活支援施設におけるソーシャルワーク実践の現状と課題－困難ケースへの対応とRSW実践の定着をめざして」を開催した。

(3) 研究推進第3委員会（委員長：大島巖）

○出版・教材開発班

・2019年4月に出版した『ソーシャルワーカーのための研究ガイドブック』の活用に向けて、職能4団体とのコラボによる研究ワークショップ開催への働き掛けを行った。

・2021年6月に開催される日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会で実施する研究ワークショップに向けての検討を行った。

○社会貢献推進班

・「ソーシャルワーク・コラボセミナー in かごしま」を開催した。当日は106名の参加があった。

日時：2020年11月8日（日）（*オンライン開催）

テーマ：「貧困問題への地域福祉実践～地域固有の知の可視化、そして共有に向けて～」

【主催】 日本ソーシャルワーク学会・（公社）鹿児島県社会福祉士会

【後援】 （一社）鹿児島県精神保健福祉士協会・鹿児島県医療ソーシャルワーカー協会

鹿児島県ソーシャルワーカー協会・(公社)日本社会福祉士会
(公社)日本精神保健福祉士協会・(公社)日本医療社会福祉協会
日本ソーシャルワーカー協会

(4) 国際委員会 (委員長：黒木保博)

世界的なコロナ禍における国際的状況に関する情報収集や学会員への情報提供などについて検討を行った。

(5) 研究倫理委員会 (委員長：久保美紀)

- ・会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努めた。
- ・2020年度は研究倫理上の問題は発生しなかった。

(6) 総務委員会 (委員長：空閑浩人)

- ①ニュースレターの発行：第128号は2020年6月発行済、第129号は2021年3月に発行した。
- ②メールマガジン (MM) の配信
 - ・第78号 (2020年4月配信) ~第89号 (2021年3月配信済) の毎月の配信を行った
 - ・あわせてフェイスブックを活用しての発信も行った
- ③ホームページの運営管理
 - ・大会、コラボ、セミナー等資料、ニュースレターのアップを可能にした (2020年度分より)
 - ・その他コンテンツの充実等に努めた
- ④学会広報 (会員拡大) のための「プロモーション動画」作成について
 - ・会員拡大、学会およびソーシャルワークの魅力発信等のための学会広報動画作成について検討を行った (2021年7月完成予定)。
- ⑤その他・庶務事項等
 - ・(株) ワールドプランニングへ委託している業務内容
会員管理、学会経費等の経理業務、学会事務用品の管理、学会事務運営

(7) 正副会長会議

会長：小山隆 副会長：大島 巖・久保美紀・志水幸・空閑浩人 庶務担当：野村裕美

①正副会長会議の開催報告

2020年6月27日 (土) 19時~20時 (* web会議)

2020年11月7日 (土) 17時~18時30分 (* web会議)

2021年1月14日 (木) 19時45分~21時30分 (* web会議)

各委員会の事業の進行管理の他、理事会の体制強化、学会の企画広報、職等の学会運営の課題 (特命事項) について取り組みを検討した。

②特命事項と担当副会長

- ・理事会の体制強化&職能団体との連携 (大島 巖)・学会資料のアーカイブス化 (久保美紀)
- ・他学会との連携 (志水 幸)・学会広報&会員拡大 (空閑浩人)

4. 2020年度会員異動報告

① 2020年度入会者 (敬称略) 理事会承認後に入会金納入者 (会則第5条)

【入会者】 18名 (17名 +1団体)

「正会員」17名

伊藤 一三（東大和市教育委員会） 大熊絵理菜（高知県立大学） 木下 大生（武蔵野大学）
瀬戸翔太郎（匝瑳市社会福祉協議会） 高梨 友也（やまがた市民福祉会）
中村美佐子（埼玉県ふじみ野市地域包括支援センターふくおか）
芳賀 恭司（東日本国際大学） 香山 芳範（明石市福祉総務部明石市成年後見センター）
岸本 尚大（全国社会福祉協議会） 恒吉 藍（難民支援協会）
菅田 賢治（母子生活支援施設仙台つばさ荘） 姜 民護（同志社大学）
加納 裕輝（広島市安佐北区社会福祉協議会） 山口 倫子（島根大学）
山田 克宏（秋田看護大学） 渡辺 明夏（中部学院大学）
加藤 昭宏（長久手市社会福祉協議会）

「賛助会員」1団体

社会福祉法人宏量福祉会・母子生活支援施設「野菊荘」

② 2020年度退会者（敬称略）

【正会員】20名（通常退会17名、物故1名、強制退会（3年間会費滞納2名）

内田宏明、佐藤香奈子、高田明子、高橋一弘、竹中哲夫、西村真希、狭間香代子、
宮澤明音、渡部律子、片山 徹、宮嶋 淳、本橋利恵、浅野正嗣、佃志津子、
圓林今日子、北川博司、高見宇造、石川久展、川勾亜紀奈、山口広作

③ 2021年3月31日現在の会員数

・総会員数 618名 ・正会員 614名 準会員 2名 賛助会員 2団体

議案〔2〕 2020年度 決算報告（案）

1. 2020年度収支決算報告〔資料1〕

総務担当より、2020年度の一般会計および特別会計についての決算報告があった（下図参照）。

〔資料1〕

日本ソーシャルワーク学会 2020年度決算書

2021年3月31日

I. 一般会計

1. 収入

（単位：円）

項目	2020年度 予算	2020年度 決算	差異 (収入減△)	備考
1 年会費	4,800,000	4,894,000	94,000	正会員：607件、準会員2件、賛助会員2件 18件
2 入会金	150,000	90,000	△ 60,000	
3 印税など	150,000	0	△ 150,000	
4 事業収入	50,000	8,132	△ 41,868	メテオ（著作権使用料）
5 雑収入	2,000	43	△ 1,957	利息
6 寄付金等	0	354,045	354,045	第37回大会事務局（鹿児島国際大学）からの寄付金
収入小計	5,152,000	5,346,220	194,220	
前年度繰越金	3,945,471	3,857,014	-	
収入合計	9,097,471	9,203,234	-	

2. 支出

(単位：円)

項目	2020年度 予算	2020年度 決算	差異 (支出増△)	備考
(研究推進第1委員会活動費)				
1 学会誌発行費	600,000	188,237	411,763	編集費(2号分)、英文校閲、執筆料
2 学会賞関連費	500,000	500,000	0	特別会計(学術奨励賞/学会賞)へ繰入
3 会員研究奨励費	500,000	0	500,000	
(研究推進第2委員会活動費)				
4 大会関連費	500,000	0	500,000	大会準備費(2021年度大会は学会本体によるオンライン大会のため執行なし)
5 大会企画費	200,000	6,600	193,400	学会企画シンポジウム謝金等
6 研究集会費	200,000	66,685	133,315	研究集会(学会セミナー)事業費
7 共同研究費	600,000	22,176	577,824	共同研究費、会議費等
(研究推進第3委員会活動費)				
8 出版・教材開発費	300,000	0	300,000	旅費、会議費等
9 社会貢献推進費	400,000	70,810	329,190	ソーシャルワーク・コラボ(鹿児島コラボ)事業費
(国際委員会)				
10 国際委員会活動費	170,000	0	170,000	国際セミナー協賛金
(研究倫理委員会)				
11 研究倫理委員会活動費	80,000	0	80,000	旅費、会議費等
(広報・渉外)				
12 福祉系学会連絡協議会関連費	100,000	100,000	0	日本学術協力財団賛助会費、日本社会福祉系学会連合分担金
13 SCS 研究協議会関連費	110,000	100,000	10,000	SCS 研究協議会分担金
14 学会通信発行費	660,000	307,901	352,099	発行費、発送費(2号分)
15 ホームページ等運営費	180,000	163,900	16,100	ホームページ管理費、メールマガジン委託費
16 会員拡大・体制整備費	50,000	0	50,000	
(学会運営費)				
17 理事会費	300,000	0	300,000	
18 正副会長会費	50,000	0	50,000	
19 事務局委託費	1,000,000	905,960	94,040	事務センター((株)ワールド・プランニング)委託費
20 事務局運営費	380,000	342,120	37,880	印刷・発送費、請求書・封筒作成費等
21 役員選挙費	0	0	0	
(その他)				
22 振込手数料	20,000	27,357	△ 7,357	会費振込に伴う手数料及び弔電代・年会費(過払分)返金
23 出版準備積立	0	0	0	
24 予備費	100,000	0	100,000	
支出小計	7,000,000	2,801,746	4,198,254	
次年度繰越金	2,097,471	6,401,488	-	2021年度への繰越金
支出合計	9,097,471	9,203,234	-	

II. 特別会計(学会賞)

1. 収入

(単位：円)

項目	2020年度 予算	2020年度 決算	差異 (収入減△)	備考
1 前年度繰越金	3,410,005	3,175,680	△ 234,325	
2 一般会計からの繰入金	500,000	500,000	0	一般会計「学会賞関連費」より繰入
3 雑収入	0	26	26	利息
収入合計	3,910,005	3,675,706	△ 234,299	

2. 支出

(単位：円)

項目	2020年度 予算	2020年度 決算	差異 (支出増△)	備考
1 学会賞副賞	300,000	200,000	100,000	
2 学会賞関連費	500,000	96,740	403,260	書籍代等審査・選考関係費用、賞状・額縁購入費等
3 その他	4,000	3,685	315	振込手数料
4 次年度繰越金	3,106,005	3,375,281	△ 269,276	
支出合計	3,910,005	3,675,706	234,299	

Ⅲ. 特別会計（出版事業）

1. 収入

項目	2020年度 予算	2020年度 決算	差異 (収入減△)	備考
1 前年度繰越金	22	22	0	
2 一般会計からの繰入金	0	0	0	
3 雑収入	0	2	2	利息
収入合計	22	24	2	

2. 支出

項目	2020年度 予算	2020年度 決算	差異 (支出増△)	備考
1 出版事業費	0	0	0	出版費
2 出版事業関連費	0	0	0	
3 その他	0	0	0	振込手数料
4 次年度繰越金	22	24	△2	
支出合計	22	24	△2	

2. 2020年度監査報告

総務担当より、2021年6月17日（水）に岡本民夫監事、黒木保博監事による監査が行われ、監査報告書が提出された旨の報告があった。

議案〔3〕 2021年度活動計画（案）

1. 2021年度役員体制

役職	氏名	理事・役員任期	備考
会長	小山 隆	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	
副会長	久保 美紀	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会・委員長／研究倫理委員会委員長
理事	志水 幸	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第2委員会・委員長
	大島 巖	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第3委員会・委員長
	空閑 浩人	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	総務委員会・委員長
	大谷 京子	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第1委員会
	岡田 まり	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会／国際委員会
	木村 容子	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第1委員会
	和気 純子	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第1委員会
	荒井 浩道	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／総務委員会
	池田 雅子	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第2委員会／研究推進第3委員会
委員会	白川 充	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／研究推進第3委員会
	杉野 聖子	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／総務委員会
	横山登志子	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第2委員会／総務委員会
	ヴァイラーク・ヴィクトル	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第2委員会／国際委員会

	浅野 貴博	2020.7.4 ~ 2022. 総会終了時	研究推進第3委員会／国際委員会
	佐藤 俊一	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第3委員会／研究倫理委員会
	保正 友子	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第3委員会／総務委員会
監 事	岡本 民夫	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第1委員会
	黒木 保博	2018.7.21 ~ 2022. 総会終了時	国際委員会・委員長
庶務担当理事	野村 裕美	2020.7.4 ~ 2024. 総会終了時	研究推進第3委員会／庶務

2. 2021 年度委員会体制（*は役員以外の委員）

①研究推進第1委員会

委員長：久保美紀（副会長） 委員：大谷京子 岡田まり 岡本民夫 木村容子 和気純子

・学会誌編集委員会 和気純子 大谷京子 岡田まり（*加山弾 *梅崎薫）

・学会賞選考委員会 木村容子 小山隆 久保美紀

（*木村真理子 *片岡靖子 *川島ゆり子）

・研究奨励委員会 大谷京子

②研究推進第2委員会

委員長：志水 幸（副会長）

委員：荒井浩道 池田雅子 白川充 杉野聖子 横山登志子 ヴィクトル・ヴィラーク

③研究推進第3委員会

委員長：大島 巖（副会長） 委員：浅野貴博 池田雅子 佐藤俊一 白川 充 保正友子 野村裕美

④国際委員会

委員長：黒木保博 委員：浅野貴博 岡田まり ヴィクトル・ヴィラーク

⑤研究倫理委員会

委員長：久保美紀（副会長） 委員：佐藤俊一（*松倉真理子）

⑥総務委員会

委員長：空閑浩人（副会長） 委員：荒井浩道 保正友子 横山登志子 杉野聖子 野村裕美

庶務担当：野村裕美

委託業者 (株)ワールドプランニング

3. 2021 年度委員会等活動計画

(1) 正副会長会議

・学会運営について情報を共有し円滑に活動を進めるよう、3か月に1回程度会議を開催し協議する。

WEB会議も2021年度同様に活用していく。

・各委員会の事業の進行管理の他、理事会の体制強化、学会の企画広報、職能連携、他学会との連携等の学会運営の課題（特命事項）について取り組んでいく。

・特命事項と担当副会長

・理事会の体制強化&職能団体との連携（大島 巖）

- ・学会資料のアーカイブス化（久保美紀）
- ・他学会との連携（志水 幸）・学会広報&会員拡大（空閑浩人）

(2) 研究推進第1委員会

1. 学会誌編集委員会（委員長：和気純子）

- ①編集委員：大谷京子・岡田まり・梅崎薫会員・加山弾会員
- ②学会誌発行に向けての作業：42号・43号を学会ホームページ上に電子ジャーナルとして発行するとともに、J-stageで公開する。
- ③会員の積極的投稿を促すとともに、学会誌の質の向上を図る。
- ④学会誌を通して、会員の研究成果をより広く社会に発信できるように努める。
- ⑤投稿規程・執筆要領の継続的な検討を行う。

2. 学会賞選考委員会（委員長：木村真理子会員、担当理事：木村容子）

① 2021年度学会賞受賞者決定

「学術賞（学会員のうちで顕著な研究業績を上げた者の顕彰）」

「学術奨励賞（学会員のうちで研究の発展が期待される若手会員の研究奨励）」

いずれも該当なし。

② 2021年度委員会の構成（選考委員長：木村真理子会員）

選考委員：木村容子・久保美紀・小山隆 片岡靖子会員・川島ゆり子会員

③ 2022年度学会賞の選考を行う。

3. 研究奨励委員会（担当理事：大谷京子）

- ①会員の個人研究及び共同研究の促進のため、2021年度会員研究奨励費の申請を受け付け審査し、選考する。＊2021年度会員研究奨励費の採択結果（7月10日理事会承認済）

研究テーマ：「協議会による社会資源の改良・開発過程に関する研究—ソーシャルワークに焦点を当てて—」

（申請者：木村潤会員 会員番号 1015 所属：国際医療福祉大学）

(3) 研究推進第2委員会

1. 2021年度第38回大会の運営

大会運営：拡大実行委員会（第2委員会+大島副会長、宮本雅央会員、山下匡将会員）

2. 2022年度第39回大会開催校（青森県立保健大学）との協議

3. 2023年度第40回大会開催校の選定・調整

4. 2021年度研究セミナーの企画・運営

「国際的な舞台におけるソーシャルアクション～ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs～」をテーマにした研究セミナーを、研究推進第2委員会との共同企画として開催する（2022年1月開催予定）

5. 2022年度研究セミナーの企画

6. 2021年度共同研究の実施 1) 全母協との共同研究の継続 2) その他

(4) 研究推進第3委員会

1. 出版・教材開発班

2021年6月に開催される日本医療ソーシャルワーカー協会全国大会において、研究ワークショップを実施する。今後、学会主導の研究ワークショップも開催予定している。

2. 社会貢献推進班

2021年度「ソーシャルワーク・コラボ」の企画の検討を進めている。

(5) 国際委員会

- ・世界的なコロナ禍における国際的状況に関する情報収集と学会員への情報提供を行う
- ・国際的なシンポやワークショップが開催されれば本学会の共催を検討したい
- ・「国際的な舞台におけるソーシャルアクション～ソーシャルワーカーによる国連アドボカシーとSDGs～」をテーマにした研究セミナーを、研究推進第2委員会との共同企画として開催する（2022年1月開催予定）

(6) 研究倫理委員会

- ①会員に対して研究倫理にかかわる啓発に努める。
- ②研究倫理指針の継続的な検討を行う。
- ③研究倫理上の問題への的確な対応を図る。

(7) 総務委員会

1. ニュースレターの発行

2021年度は、第130号（6月）、131号（10月）、132号（2022年3月）発行予定

2. ホームページの運営管理：2021年度も引き続き、コンテンツや内容の充実に努める

3. メールマガジンの配信およびSNSを活用した情報発信

- ・毎月（月初めに）配信。2021年度も引き続き配信予定
- ・フェイスブックなどSNSを活用した情報発信に努める

4. 会員拡大、学会およびソーシャルワークの魅力発信のための学会広報動画作成について

2021年7月完成予定、学会ホームページに掲載する

5. 庶務関係事項

- ・業務の一部を㈱ワールドプランニングに委託しており、2021年度も継続して委託する

- ・委託する業務内容は

①会員管理 ②学会経費等の経理業務 ③学会事務用品の管理 ④学会事務運営

6. 2021年度 第38回大会について

- ・学会主催オンライン大会 ・日時：2021年7月17日（土）～18日（日）
- ・大会テーマ「ソーシャルワークの新たな地平 - 継承と刷新 - 」

7. 学会役員選挙の実施について

- ・前回同様に、オンラインによる投票システムを利用して実施する

- ・スケジュール案

2021年7月：選挙管理委員会設置・2021年9月：第1回選挙管理委員会の開催

2021年9月～10月：会員名簿の作成・2021年11月：選挙要項の作成

2021年12月1日（予定）：公示・2021年12月5日から19日（予定）：投票

2021年12月21日（予定）：第2回選挙管理委員会の開催・開票

2022年1月：理事会で報告

・選挙管理委員会は、以下の3名の会員から構成される旨報告があった。

・選挙管理委員：工藤秀明会員、狩野晴子会員、口村淳会員

議案〔4〕 2021年度 予算(案) [資料2]

総務担当より、2021年度の一般会計および特別会計の予算についての提案があった。

[資料2]

日本ソーシャルワーク学会 2021年度予算書

2021年7月17日

I. 一般会計

1. 収入

(単位：円)

項目	2021年度 予算	2020年度 予算	2020年度 決算	備考
1 年会費	4,800,000	4,800,000	4,894,000	
2 入会金	150,000	150,000	90,000	
3 印税など	100,000	150,000	0	学会監修出版物印税
4 事業収入	50,000	50,000	8,132	セミナー開催参加費等
5 雑収入	1,000	2,000	43	利息等
6 寄付金等	0	0	354,045	
収入小計	5,101,000	5,152,000	5,346,220	
前年度繰越金	6,401,488	3,945,471	3,857,014	
収入合計	11,502,488	9,097,471	9,203,234	

2. 支出

(単位：円)

項目	2021年度 予算	2020年度 予算	2020年度 決算	備考
(研究推進第1委員会活動費)				
1 学会誌発行費	600,000	600,000	188,237	編集費(2号分)、英文翻訳費等、J-STAGE掲載費等
2 学会賞関連費	500,000	500,000	500,000	特別会計(学会賞)へ繰入
3 会員研究奨励費	500,000	500,000	0	
(研究推進第2委員会活動費)				
4 大会関連費	500,000	500,000	0	大会準備費(2022年度第39回大会開催校へ)
5 大会企画費	200,000	200,000	6,600	学会企画シンポジウム謝金等関連費
6 研究集会費	200,000	200,000	66,685	研究集会(研究セミナー開催等)事業費
7 共同研究費	600,000	600,000	22,176	共同研究費、旅費、会議費等
(研究推進第3委員会活動費)				
8 出版・教材開発費	300,000	300,000	0	旅費、会議費等
9 社会貢献推進費	400,000	400,000	70,810	ソーシャルワーク・コラボ事業費
(国際委員会)				
10 国際委員会活動費	300,000	170,000	0	セミナー開催費、共催事業協賛金、旅費、会議費等
(研究倫理委員会)				
11 研究倫理委員会活動費	80,000	80,000	0	旅費、会議費等
(広報・渉外)				
12 福祉系学会連絡協議会関連費	100,000	100,000	100,000	日本学術協力財団賛助会費、日本社会福祉系学会連合分担金
13 SCS研究協議会関連費	110,000	110,000	100,000	SCS研究協議会分担金
14 学会通信発行費	660,000	660,000	307,901	発行費、発送費(3号分)
15 ホームページ等運営費	180,000	180,000	163,900	ホームページ管理費、メールマガジン委託費
16 会員拡大・体制整備費	350,000	50,000	0	「学会広報動画」制作費等
(学会運営費)				
17 理事会費	300,000	300,000	0	旅費、会議費等
18 正副会長会費	50,000	50,000	0	旅費、会議費等
19 事務局委託費	1,000,000	1,000,000	905,960	事務センター((株)ワールド・プランニング)委託費
20 事務局運営費	380,000	380,000	342,120	印刷・発送費、請求書・封筒作成費等
21 役員選挙費	800,000	0	0	会員調査・名簿作成、選挙システム整備費等

(その他)				
22 振込手数料	20,000	20,000	27,357	
23 出版準備積立	0	0	0	
24 予備費	100,000	100,000	0	
支出小計	8,230,000	7,000,000	2,801,746	
次年度繰越金	3,272,488	2,097,471	6,401,488	2022年度への繰越金
支出合計	11,502,488	9,097,471	9,203,234	

II. 特別会計（学会賞）

1. 収入

(単位：円)

項目	2021年度 予算	2020年度 予算	2020年度 決算	備考
1 前年度繰越金	3,375,281	3,410,005	3,175,680	
2 一般会計からの繰入金	500,000	500,000	500,000	一般会計 学術奨励賞関連費より繰入
3 雑収入	0	0	26	利息
収入合計	3,875,281	3,910,005	3,675,706	

2. 支出

(単位：円)

項目	2021年度 予算	2020年度 予算	2020年度 決算	備考
1 学会賞副賞	300,000	300,000	200,000	学術賞、学術奨励賞
2 学会賞関連費	500,000	500,000	96,740	賞状作成費、選考委員資料購入、会議費等
3 その他	4,000	4,000	3,685	振込手数料
4 次年度繰越金	3,071,281	3,106,005	3,375,281	
支出合計	3,875,281	3,910,005	3,675,706	

III. 特別会計（出版事業）

1. 収入

項目	2021年度 予算	2020年度 予算	2020年度 決算	備考
1 前年度繰越金	24	22	22	
2 一般会計からの繰入金	0	0	0	
3 雑収入	0	0	2	利息
収入合計	24	22	24	

2. 支出

項目	2021年度 予算	2020年度 予算	2020年度 決算	備考
1 出版事業費	0	0	0	
2 出版事業関連費	0	0	0	
3 その他	0	0	0	
4 次年度繰越金	24	22	24	
支出合計	24	22	24	

議案 [5] 次回 (2022 年度・第 39 回) 大会 (案)

開催校：青森県立保健大学（同大学所属会員を中心に実行委員会を組成予定）

日 時：2022 年 7 月 2 日（土）～7 月 3 日（日）現時点では、対面開催を予定

会 場：青森県立保健大学（青森県青森市大字浜館字間瀬 58-1）

大会テーマ「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性（仮）」

Ⅱ. 報告事項

総務担当より、以下の事項について報告があった。

1. 「日本学術会議会員の任命拒否」に関する共同声明について
2. 諸機関・団体からの寄贈資料および寄贈図書

V. 研究セミナーのご案内

2021 年度日本ソーシャルワーク学会・国際研究セミナーを以下の内容で開催します。多くの方のご参加をお待ちしております。

テーマ：国際的な舞台におけるソーシャルアクション

ーソーシャルワーカーによる国連アドボカシーと SDGs

国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）と国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）は、国連の諮問資格を有し、各地の国連事務所において活動している。これらの国連アドボカシーは、ソーシャルワーカーにとって、国際的な舞台におけるソーシャルアクションの機会となっている。

近年、持続可能な開発目標（SDGs）は、「グローバルな社会変革をもたらす」と「地球上の誰一人も取り残さない」というソーシャルワークの理念と一致しており、その実現に向けてソーシャルワーカーの活躍に対する期待が高まっている。一方、コロナ禍によって、開発目標の進捗が遅れることが懸念される中、2021 年 4 月に『ソーシャルワークと国連の SDGs に係る IFSW ポリシーペーパー』（http://www.jasw.jp/news/pdf/2021/2021_ifsw-sdgs.pdf）が発行された。

本セミナーでは、国際団体のグローバルな活動に関する基調講演を踏まえて、アジア太平洋地域における国連アドボカシーと、日本からの関連取り組みについての報告を取り上げる

内 容：基調講演

プリスカ・フライシュリン（IFSW 国連諮問委員長）

アジア太平洋地域報告

セバスティアン・コルドバ（IFSW アジア太平洋地域国連代表）

日本の国内報告

高嶺 豊（日本ソーシャルワーカー協会国際委員）

ディスカッション・質疑応答

日 時：2022 年 1 月 22 日（土）15 時～（*日本時間）

開催方法：日本語・英語の同時通訳付きの Zoom ウェビナー

申し込み：参加登録は以下の URL から 2022 年 1 月 19 日（水）までに入力

<https://forms.gle/1742rTuzZe9qCXJy7>

*その後、前日までに申し込み者に Zoom リンクがメール送信

問い合わせ：ヴィラグ・ヴィクトル（長崎国際大学）

メール連絡先 viktor.virag2@gmail.com

VI. 図書紹介：自著紹介

小嶋章吾会員より自著紹介の掲載希望がありました。ソーシャルワーク記録に関する実践的な図書になりますので会員の皆様に自著紹介として、お知らせします。

鳶末憲子・小嶋章吾『医療・福祉の質が高まる生活支援記録法 [F-SOAIP] 多職種の実践を可視化する新しい経過記録』（中央法規出版、2020年発行）

国際医療福祉大学 小嶋 章吾

●ソーシャルワーク実践の可視化に記録は不可欠

他職種、特に保健医療専門職からソーシャルワーカーの記録は読みづらいと言われ、保健医療分野で開発された項目形式の SOAP では書きづらいという。またソーシャルワーカー自身は記録について訓練を受けたことがないと言う。実習記録の経験がほぼ唯一の訓練の機会になるはずだが日誌にとどまり、必ずしもソーシャルワーク記録（以下、ソーシャルワークは SW と略す。）としての訓練の機会になっていない。教育面では記録一般については教授できていても、殊、経過記録となるといきおい自由記述（叙述形式）となり、せいぜい文体の区別や留意点の教授にとどまる。一方、実践面では SW 記録が多職種間で共有される時代にあって、SW 記録を通じて専門性を十分に可視化できていない。研究面でも SW 記録は必ずしも十分にデータ源として活用されていない。

●問題指向型記録法 SOAP の隘路

SW 記録における問題指向型記録法 SOAP の準用は、SW 記録に適した項目形式の記録法が従来なかったためと思われる。ケーグルが提唱した SOAIGP も 1)、実用化された形跡を確認できない。

SOAP は、①医学モデルに依拠しているため、問題点（#で列举）毎に記録場面が細分化され、ストレングスに着目した記録にならない。②医師の指示に基づく一方向的な実践を記録するには適しているが、SW のような双方向的な相互作用を記録することは難しい。③介入内容を記載する項目がないため、他の項目に混在して記載され明示化できない。

●生活モデルに依拠し SW 実践を可視化できる生活支援記録法 F-SOAIP（エフソ・アイピー）

F-SOAIP は経過記録に必要最小限の 6 項目からなり、実践過程のすべてを網羅できる。このうち 4 項目は SOAP と共通だが、異なる点は、①F (Focus) により記録場면을俯瞰したタイトルを付すことができ、ストレングスにも着目できる。なお、経過記録を保健医療専門職と共用している場合には、F と # を併記できる。②I (Intervention) により介入内容を明示できる。③重要な点であるが 2)、同じ P でも、SOAP の場合は A(Assessment) に基づく P(Plan) を意味しその場で実施したと当面の計画とが区別されない。実施内容は P (Plan) や O (Objective Data) に混在して記載される。F-SOAIP の P はその場で実施した介入結果に基づく当面の計画を意味している。

●F-SOAIP の有用性

F-SOAIP によりミクロレベルでは、①実践過程を可視化できる。②専門職としてのリフレクションに有用である。②記録業務を効率化できる。③記録内容をデータとして利活用しやすい。④記録が冗長にならず見読性に優れている。メゾレベルでは、⑤ SOAP を用いる保健医療専門職とも経過記録を共用でき、情報

共有や相互理解が容易となる。⑥事例検討会等の会議録や電話メモにも活用できる。マクロレベルでは、⑦地域ケア会議等で要検討の記録場面がそのまま共有資料にできる、⑧FやPといった項目の蓄積・分析より個別課題から地域課題を析出できる。

●F－SOAIPの詳細は、本書及びHP (<http://seikatsu.care>) を参照されたい。

- 1) Jill Doner Kagle, Social Work Records, 2ed Ed., Waveland Press, 1991. (久保絃章・佐藤豊道監訳『ソーシャルワーク記録』相川書房、2006年、121頁)
- 2) 福島喜代子、ソーシャルワーカーの「思考」に沿った記録の試み－SOAP方式に「I：支援内容」を加え「P」を「今後の計画」とした記録方式－、日本ソーシャルワーク学会第34回大会、2017年

Ⅶ. その他

◆日本ソーシャルワーク学会のプロモーション動画が完成しました。

プロモーション動画は学会ホームページに掲載しています。ぜひ、ご覧いただき、周囲の方々に御視聴をお勧めいただければと思います。

<https://www.jsssw.org/>

◆「ソーシャルワーク学会誌」書評本・グッドプラクティショナーの募集について

現在、年2回発行の学会誌では、投稿論文と書評、そしてグッドプラクティショナーが主な内容となっております。書評とグッドプラクティショナーは広く学会員から情報提供をお願いしているところですが、十分に集まっていないのが実状です。

そこで、書評に取り上げるべき本、グッドプラクティショナーとして紹介したい実践者や団体について、会員の皆様からの情報提供をお願い致します。

◆メールマガジン掲載情報の募集について

本学会では、学会情報の他に、ソーシャルワークに関連する情報、研究会等の情報を広く皆様にご紹介しています。ご所属の学会や主催されている活動等に関する情報、新刊本情報の掲載を希望される場合は、広報・渉外担当の保正友子理事のメールアドレス< mail : hosh@n-fukushi.ac.jp >にお知らせください。

月末までにいただいた情報は、「特定の個人や団体の利益誘導につながる情報ではなく、あくまでも学会員の利益に資する情報」という基準にそって、広報・渉外担当理事で検討し掲載いたします。奮って、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

送付先：広報・渉外担当理事 保正 友子 (日本福祉大学) mail : hosh@n-fukushi.ac.jp

編 集 後 記

日本ソーシャルワーク学会通信（ニュースレター）第131号をお届けします。今回は、7月の第38回大会の報告号です。大会では「ソーシャルワークの新たな地平－継承と刷新－」というテーマのもと、近年の国内外の動向をふまえつつ熱い議論が行われました。

さて、この1年半、新型コロナウイルス感染症に翻弄され続け、ワクチン接種が進んだとはいえ、いまだ渦中にあります。この間、コロナ禍のソーシャルワークにおける現状や課題をテーマとしたオンライン研修がさまざまな関係団体で実施されてきました。そこでは、コロナ以前からの問題がより深刻なかたちで可視化されたことや、対面を基本としたソーシャルワーク支援の限界とそこでの工夫が報告されていました。ICTの活用はもちろんのこと、体温が感じられるような素朴な支援方法も含まれていたことにほっとしました。また、あまり強調されませんが、支援者自身もさまざまなストレスを抱えつつ日々の生活を重ねていることと思います。

目の前の実践（支援・研究・教育）のなかで「ソーシャルワークの新たな地平」にむけた小さなアクションを大事にしたいと思います。

札幌学院大学／理事（編集担当） 横山 登志子

【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 2F（株） ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431 FAX：03-5206-7757

E-mail：jsssw@zfhv.ftbb.net <http://www.jsssw.org>

